

ふくしまの

今

川内村の特産
イワナを守りたい

今年1月に「戻れる人から戻ろう」と帰村宣言した川内村。全村避難の最中も村の特産品である養殖イワナの命を絶やさないために、尽力してきた人がいました。

豊かな森に囲まれた源流の里、川内村には、以前から天然のイワナが数多く生息していました。「村で何か特産品を作ろう」ということで、イワナを養殖することが決まったのが平成5年。東京からUターンしてきた私が、その事業に採用され県の内水面水産試験場で一から勉強して設備を整え、稚魚を育ててきたんです」と話すのは、いわなの郷の渡邊秀朗さんです。

例年1月に採卵、受精した稚魚を養殖池に放すのが3月頃。ふ化直後は、魚の身体に栄養がつまった袋（臍嚢）がついているのでエサは必要ありません。池に放すのは稚魚が自らエサを食べ始める頃です。

渡邊さんによると、「去年は、まだ身体に栄養を蓄えられず、少しずつ何度もエサやりをしなくてはならない時期」に、原発事故に見舞われてしまいました。

いわなの郷 ● 渡邊秀朗さん（川内村）

困難を乗り越えた新しい命。
今年のことさら成長がうれしい。



(右) 寒風の吹き付ける中でイワナの世話をする渡邊さん。網の中のイワナは採卵用の親魚。

(上) 川の上流の冷水域を好むイワナ。養殖場には村内の清流を引き込んでいます。

(左) 現在は、水からもイワナからも放射性物質は検出されていません。



絆つないで

避難生活を余儀なくされている皆さんが、さまざまな形でお互いの絆と交流を深める場が広がっています。今回は、郡山市の仮設住宅の一角で活動している「生活復興支援おだがいさまセンター」を紹介します。

生活復興支援おだがいさまセンター [高岡町]



富岡にしかできないことを ここを拠点に広げていきたい

郡山市富岡町にある高岡町の仮設住宅敷地内の施設は、高齢者などのサポート拠点として2月15日に開所したばかり。木の香りが漂う室内には、この日開かれていた編み物教室に参加された皆さんの、にぎやかな声が響いていました。

同センターは、ビッグパレットふくしまに避難所が設置された際に立ち上げたボランティアセンターが始まりで、避難所の閉鎖以降は活動の拠点となる場がなく、県や町に要望して実現しました。「富岡町だけでなく、他の町村の方や郡山市の方々にも利用していただいて、地域交流の場となれば」と吉田恵子さん。

3月11日には、臨時災害FM(76.7MHz)も開局しました。「皆さんが欲しがっているのは、だれがどこに避難をして元気であるかといった情報です。このFMを通じて、そうした情報も発信していければ」と吉田さんは話します。町が各世帯にタブレット型パソコンを貸出すことも決まり、全国で町の情報を聴くことができるので、情報と一緒に元気や笑顔も届けたいと、新たな活動に期待を込めています。



TEL 024 (935) 3332

ブログ <http://odagaisama.com/>

ツイッター <http://twitter.com/odagaisama>

▲毎週発行している情報誌



▲生活復興支援おだがいさまセンター
スタッフの皆さん



▲この日初めて参加したという人も、
話に花を咲かせていました

渡邊さん自身も、郡山市を経て家族と一緒に千葉県へ避難。その間もイワナが気になって何度か川内に戻ったといいます。「5月からは、管理人室に寝泊まりして世話をしています。うちはまだ子どもが小さいので、家族と魚のどっちが大事なのと妻に言われてしまっただけ」と渡邊さんは苦笑い。

元気に命をつないでくれた
稚魚の姿に励まされて

原発事故後、イワナは定期的にモニタリングを続けていますが、ごく初期に微量の放射性物質が検出されただけで、現在は全く検出されていません。冬場の冷たい風に当ててつくる名物「石魚の寒風干し」の作業も少しずつ再開しました。

「養殖も寒風干しも試行錯誤の連続でしたが、手塩にかけたイワナをおいしいと食べてくれる人がいるから続けてくることができました。何年も頑張ってきたことを、これで終わらせるわけにはいかないんです。そんな渡邊さんの思いを受け、今年に入ってふ化した稚魚たちも、元気に命をつないでいました。」



(左) 受精卵は箱の中でふ化の待ちます。かえったばかりの稚魚を見つけ、うれしそうな表情の渡邊さん。